

スリナムのジャワ人

関本照夫

「外文明と内世界」という概念と、これから話すスリナムのことがどう関わるのか、まず考えてみたい。この概念はよるべき典拠もない新しいものなので、私なりに連想してみた。まず、外にある、外からくる文明というのは、常識的によく語られることであまり問題はないだろう。

「内世界」の方はいろいろな意味にとりうるが、とりあえず外来の強い諸文明の影響を受けながらそれに呑み込まれず、相対的に独自の生息空間と伝統を維持している共同体の「われわれ」意識を構成するのが「内世界」であろう。日本や東南アジアのいくつかの社会は、こうした内世界のイメージで捉えやすい。こうしたイメージで捉えやすい人間集団は、外に対する内を実現する「われわれの土地」として、十分な広さの地理的空間を排他的に占有している。排他的に占有とは、他の集団の者の侵入を文字どおり許さないということではなく、例えば、マレー人が我々はブミプトラだというように、ここは本来われわれの土地だという空間をもっているということである。つまり「内世界」を語るには相対的に安定した「内」を保ちうる政治的条件が必要である。そうすると例えば、インドネシアのチャイニーズやカンボジア、ベトナムのチャムにとっての「内世界」とは何だろうか。「内世界」を他と区別された「われわれ」意識の内実と考えれば、彼らにも「内世界」はある。しかしそれは安定した均質の共同の表象とは言い難く、はるかに流動的で焦点を結びにくいものではないだろうか。

地図上に空間を区切ってそれぞれそこに住む人間集団の個性や伝統を考えるやり方は、現代世界の常識的思考であるが、そうした分類からはみ出してしまう人々の存在を忘れさせてしまう。また、地図をいくつもの空間に区切って人間を分類するのはこの世界は政治権力の作用であるのに、事態を生物種間の棲み分けのようなものに見せてしまうところはないだろうか。スリナムのジャワ人もまた自分達の固有の共同空間をいくつかの村を越えた規模では持っていない。彼等は近代の世界経済とオランダの政治権力の作用により、たまたまスリナムと呼ばれる土地に置かれてしまった。このごく小規模で孤立した移民集団は、カリブ海にせよ東南アジアにせよ地域研究の枠に納まりにくく、また彼らの「内世界」は焦点を結ぶべき安定した空間を与えられていない。だが逆にその事によって、世界を地図上で面に区切る事から出発する地域研究の方法の限界を、明らかにしてくれるのではないかと考えているのである。

スリナムをふくむカリブ地域の国々は、19世紀の半ばまでに、奴隷制度が廃止されるに伴い、農園労働力の不足を補うためアジアから年季契約労働の移民を導入した。最初は中国人だったが、次に長期にわたり大量に移住したのはインド人だった。そして、様々な地域からやってき

た人々と、その子孫から成る国々ができあがった。そのため三重、四重の多言語使用、多様なクレオール言語の発達がこの地域の日常となって今日に至る。カリブ地域には英領、仏領、西領の植民地が混在する中に、7地域からなる蘭領西インド植民地が存在した。スリナムはその一つであり1975年に独立した。この国は、小さな人口がエスニックに分岐し、また国民的統一のシンボルに乏しい。アフリカ系クレオール（奴隷解放後、おもに都市部に定住したアフリカ系の住民とその混血を指して言う）とインド系住民が二つの優勢な集団をなして拮抗し、少数の華人がいるという点では他のカリブ地域の国と似ているが、スリナムはさらにジャワ人の集団を擁している。この点でスリナムのジャワ人はカリブ地域で孤立し、またこの国自体がオランダ語圏であるため、南北アメリカ大陸全体の中で孤立している。つまりスリナムのジャワ人は二重に孤立している。

1890年から1939年までの間毎年のように、合計33,000人のジャワ人がスリナムに運ばれてきた。彼らは白人が経営する私営プランテーションの契約労働者として5年間働き、年季が明けた者の内23.3%は農園会社の費用でジャワに帰ったが、残りの者は土地を与えられ自営小農としてスリナムに住みつくことになった。スリナム定住という選択は、多くの場合消極的な選択であった。すなわち帰ってもあてが無いとか、とりあえず家がもらえるというのでそうしてしまったか、希望すればジャワに帰れることを知らなかったからである。彼らにとってジャワは常に望郷の思いの対象であった。また時折ユートピア的な観念がジャワに投影され、「ジャワからの迎えの船がまもなく港につく」という、ほとんど千年王国的な帰郷運動が彼らの幻想を組織した。

大戦前のジャワ人は、大体がプランテーションと農村に住んでいた。そこから抜け出すにはオランダ語の能力が必要だったが、ジャワ人子弟への本格的な学校教育が徐々に普及し出すのは、第二次大戦後のことであった。この教育の遅れが、スリナムのジャワ人を自分達だけの世界に閉じ込め、クレオールやインド人に対する政治・経済・社会上の劣位をもたらした直接の理由である。クレオールや、先に社会的に上昇をはたしたインド人からは二級市民と見下された。ジャワ人は根っからの農民であり、自分達のジャワ語とジャワ文化の世界にのみ閉じ込め、文化的に著しく保守的であるというステレオタイプは、この時期にできあがる。これは今日まで、クレオールとインド人の意識、さらにはスリナム研究文献をも支配している。このことを、19世紀以降のジャワがオランダ権力という圧倒的に強い異質な力に直面して以来の、歴史的に形成されたジャワ人の自文化内向的な適応の様式が、スリナムに持ち込まれたというふうに見ることもできるであろう。

ただジャワと違ってスリナムには、そうしたジャワ文化を価値づけ、一つの型に規範化する政治的力は存在しなかった。ジャワ語の敬語法、スラムタン儀礼、影絵芝居、ガメラン音楽、舞踊、演劇、拳法等々、ジャワ文化を構成するとされる代表的な要素の多くがスリナムのジャワ人の間で見出される。だがそれらの個々の中身は、現在のジャワに見出されるものと異なる点も多い。ジャワ人のスリナムへの移民は例外なく下層の出身で、宮廷文化的な洗練の要素をスリナムに伝える担い手は最初から存在しなかった。また、スリナムのジャワ文化は、様々な地域からばらばらに徴募された互いに見知らぬ者達が、船中で知りあいプランテーションで共に働く中で、寄せ集めたありあわせの材料と記憶から即興的に再構成されていったものである。オランダの政治的・文化的権力、それに従属したジャワの宮廷、知識人の民族主義運動とそれから生まれたインドネシア国家という環境の中で規範が与えられ、階層的に「洗練」されたジャワ島のジャワ文化と、下層労働者が異郷で再構成したスリナム・ジャワ文化とは、個々の項目の名称が共通しても、実現される細部と全体のパターンが大きく異なっている。ただし、彼らは長年、自分達がジャワ島のジャワ人と同じ習慣と流儀の世界に生きていたと思い込んでいた。彼らが自分達を最下層労働者としてしか扱わない環境の中で、想像のジャワ世界の中に自己を見出していたのは当然のことである。

しかし最初の移民から百年たった現在、スリナムのジャワ文化はジャワ島の文化とは別のものだという意識がようやく育ち始めている。その背景には、第二次大戦中からゆっくり進行し始めたスリナム・ジャワ人の地位の上昇と、独立後のインドネシアが自分達にとって外国なのだという事実の発見があった。農村に閉じ込められていたジャワ人が外の世界に出て行くきっかけとなったのは、大戦に伴うアメリカ軍基地の土木工事であった。一方、大戦前の時期からオランダ教育を受ける子供達も次第に増え始め、大戦後には、小学校を終え就労に必要な初歩のオランダ語を身につける者、さらに首都の寄宿制中学を卒業して、都市的なホワイトカラーの仕事に就く若者も現れ始めた。同じく大戦後にスリナムの自治が認められ、民族系列別諸政党が結成されジャワ人の政党もできた。政党が票を獲得する最良の手段は支持者に公務員の職を与えることだったので、ジャワ人の中にも伝令・大工等の下級公務員職に就く者が次第に増えていった。

大戦後徐々に社会関係が変化する中で、ジャワ人は次第に、スリナムの複合社会の中で地歩を築いていったわけだが、それは個々人の生活上昇のための努力の結果として、いわば非自覚的に進んだ過程だった。例えば合衆国への後発移民とは違い、民族を越えたスリナム人の理念、スリナム・ナショナリズムといったものは、現在までほとんど未発達のままである。それはま

た、エスニシティーというものが政治的主張として均質化された強い表現をとらず、生まれ育った環境の中でおのずと身についた様々な生活の流儀の集合に留まっているということでもある。

1949年にインドネシアが独立すると、民族主義への共感、インドネシアでより豊かな暮らしができるのではないかという期待が広まった。ジャワ人大衆の間では再び幻想的な帰郷運動が広まり、多くの人々が家財を売り払い港で来るはずのないインドネシアからの迎いの船を待った。また教育程度が高く資力のある者の一部は自費でインドネシアに帰って行った。しかし、インドネシア政府はジャワへの再移住を認めないので、西スマトラの奥地に入植することになる。その後、教育や資格のない者にとってはインドネシアの暮らしは厳しいものだという便りや噂が伝わり、またスリナムに帰ってくる者もいた。スリナムのインドネシア総領事館も、帰国を勧めない、認めないという方針をとり、やがて帰郷熱は消えていく。現実のインドネシアと、彼らの共同体幻想が仮託されるイメージとしてのインドネシアとのずれが次第に明らかになっていく。すなわち今日に至るまで、スリナムのジャワ人の多くがインドネシアとはジャワ島のことと思っており、それ以外の多くの地域を含む多民族国家というイメージは持っていない。

スリナムの社会変化と、インドネシアへの期待、幻想の破綻の中で、ようやくスリナムのジャワ人はスリナムでの暮らしの安定と上昇につとめることになる。幸いにも、大戦後1975年の独立までのスリナムはボーキサイト産業が発達し、オランダの傘下で情勢も安定し、暮らしやすい所であった。またオランダ語を不自由なくあやつる都市中流のジャワ人が増え、村も都市に通勤する兼業農家の村に変わっていった。

ところが独立以降、軍事クーデター、オランダ政府の援助停止等々により、そういった一時的な繁栄と安定は崩れてしまい、独立直前から始まったオランダへの移住の波は、オランダ政府の厳しい制限にもかかわらず現在に至るまで絶えることがない。現在スリナムの人口は約40万、それに対して20万のスリナム人がオランダに住んでいると推定されている。ここで興味深いのは、オランダのスリナム・ジャワ人の中に「暖かく陽光のそそぐスリナム」への強いノスタルジーと、スリナム・ジャワ文化を守り育てようという組織運動が育っていることである。「われわれの故郷スリナム」という意識が、初めて印刷物やポピュラー音楽の媒体にのって形をとりつつある。こうした動きはスリナムに残っているジャワ人の中でも、大学レベルの教育を受けた少数の若者達に影響を与え始めている。だが他の多くのスリナム・ジャワ人にとって独立以後の混乱は、自らの文化に安定した形を与えてつなぎ止める空間、すなわち自分達の土地がないという事実を再認識させただけのことであった。

このように、都市化、多言語使用の普遍化、職業の多様化により、スリナム・ジャワ人の文

化的表現は多様化していった。過去のスリナム・ジャワ人に関する研究文献が前提していたような彼らの文化的均質性は現在では存在しない。

言語に例をとるなら、一方でジャワ語が自分の言葉であることに何の疑いも抱かない者も多いが、また、オランダ語、ジャワ語、スラナン語の間を自由に飛び交って話し、その内の何が母語だとも言えない者もいる。ジャワ語、スラナン語は理解するが、自分の言葉はオランダ語だという者もいる。未だにまったくジャワ語が支配しているように見えるいくつかのジャワ人の村でも、若い母親が幼児に話しかけている言葉は、ジャワ語の語彙をまじえたオランダ語だということに気づく。しかもオランダ人は、スリナム・ジャワ人のオランダ語はしばしば理解できないと眉をひそめるし、インドネシアからきたジャワ人は、これはひどく崩れたジャワ語だという。ジャワ人の中でいろいろな意味や程度で社会のリーダーたろうとする者は、何が正しく何が間違っているかいろいろ説を立てようとするが、決着はつかない。誰かの説を正しい権威とすべき制度と機構が、ジャワ人社会の中にはないからである。そもそも規範を立て、それを印刷その他の複製技術で固定し普及する可能性を与えられているのは、官庁、ビジネス、出版ジャーナリズム、学校の言葉であるオランダ語だけである。

言語のこうした状態を、言語学でヴァナキュラー（地方語、民間語、日常口語）と呼ぶ。スリナム・ジャワ人の文化状況は、とりわけジャワ島のジャワ文化と比べた時、宗教や儀礼にせよ、また音楽芸能の分野にせよ、すべてがヴァナキュラーである。多様であり、安定せず、静止画を作らない。インドネシアのジャワ島においても、世界のどこでも、文化表現の日常的形態はそうしたものである。ただジャワ島には、表現に規範と安定した形を与え、権威づけられたものを大量に反復再生する制度、機構が歴史的に存在した。今日もそれは、インドネシア国家と国民社会のエリートとして存在している。それは政治権力と、それと絡み合った社会的・文化的階層制である。

結局「内世界」というのは、ヴァナキュラーのことだろうか。それともヴァナキュラーが権力作用によって規範化され整序され、もはやヴァナキュラーではなくなったもののことだろうか。ジャワ社会や日本社会が、外文明に対し内世界を持つというような文脈では、それは後者のことであろう。そうだとすれば、一個の社会が有機体のように外部から物質を取り入れ、消化したり、免疫作用で排除して内部システムを守るという比喩は排除し、政治的力が自己の支配する空間の根拠づけのために、いかに文化的規範を作っていくかを問うべきであろう。あるいは、「内世界」という言葉で何かの安定した実体を考えるのではなく、ヴァナキュラーが規範化されヴァナキュラーでなくなっていく過程の規制を考えるべきだろう。

スリナムのジャワ人の事例は、ヴァナキュラーがそれを規制する正統の重しを与えられずに放置されている例として興味深い。ヴァナキュラーの元来の意味は、普遍化する力に対して土地ごとの個別的なものを含意する。スリナム・ジャワ人の文化表現は、しかるべき「本来」の土地に根づいていない。だがヴァナキュラーを、たまたまそこに置かれたものと見ずに、ある土地と必然的に分かち難く結び付いていると見る時には、すでに規範化、脱ヴァナキュラー化が始まっているのではなからうか。

コメント

弘 末 雅 士

私も同じ「外文明と内世界」という班に属しており、この班のテーマが当初どういうものを目指してきたか、また関本さんによって提起されたような問題というのは、その中でどのような位置を占めているのか、そういう点についてコメントさせて頂こうと思う。この班は、東南アジアが東西の狭間の世界として、普遍的なベクトルをもつ様々な外文明の影響を受けながら、自らの固有性を主張する空間を形成することを外と内の両者の関連の中で捉えようということからスタートしたわけである。

私はスマトラ島を専門にしているが、スマトラ島の内陸社会やジャワ世界、さらにはインドネシアはいずれも、外からの文明を伝える窓口となった開かれたフロンティア空間を通して、自らの固有性を捉えかえすことによって、独自の空間を作り上げたのであった。その際、いわばフロンティアから還流していく部分というか、「凱旋した」部分の方ばかり考えて、それによって「内世界」の固有空間が生まれてくるのだというふうに考えていた。しかし実際は、内から外に行くとは直接には還ってこない動きというのがたくさんある。本日の報告によると、スリナムに移住したジャワ人は、第一世代の人がジャワのふるさと世界を保持していたが、やがて新生国家成立とともに、インドネシアという国に対する幻想を持つに至る。ところが間もなくそれが幻滅へと変わり、人々はインドネシアを外国視することによって、自分達の観念上のジャワ世界から切り離されてしまう。それでは彼らはスリナム人としての意識を今度は強烈に持ってくるかというところでもない。むしろ逆にインド系の人々、クレオールの人々との違いをまた鮮明に意識していく。タイトな世界というものから、離脱したこういった「われわれ意識」の希薄な人々というものの存在を、「外文明と内世界」の図式の中でも解明する必要がある

るのではないのか。還流して来る場合を考える際においても、還流しない人々との関係がどうなっているかということは重要な問題である。かつては観念上のジャワに自分達の故郷があったものがそれから離脱してしまい、それかといって、まだスリナムのことを必然的な自分の故郷とっていない人々の存在が、これから先いったいどういう役割を果たしていくのだろうか。そういった無所屬的な性格を持っている人々が、広い意味での「外文明」の一部になっていくのだろうか。あるいは別の「内世界」というものを作り出していくのだろうか。私はいろんな意味でその動向が非常に興味深い。

「外文明」というのはなんとなく出発点として理解できるというお話があったが、そもそも「外文明」というものがもたらされて来る過程に於て、無所屬の人々の存在というのは非常に重要な役割を果たしているように思われる。イスラーム文明にせよ、ヨーロッパ文明にせよ、東南アジアの中にそれがもたらされて来る際に、そういう人々の担った役割というのは少なからぬものがあつた。そういう無国籍・無所屬という人々の意味をあらためて考えさせられた。

「外文明と内世界」というテーマは、こうした両者の相互の流れを通して、「外文明」を「外文明」たらしめているもの、「内世界」を「内世界」たらしめているものは何であろうかということと同時に考えねばならないであろう。それはまた、報告の中での、規範たらしめる政治権力という問題とも関連しており、そういうものの形成のされ方を考える必要性を提起した本日のスリナムのジャワ人の事例に私自身大変刺激を受けた。

質疑応答

川崎有三 思想という点で見ると、ジャワとしてのネットワークはないかもしれない。しかし、ワールドワイドなもの、例えばイスラームの要素がこの移民達の間にあつたのではないか？もしあつたなら、強力なイスラームの何かで、もっと外に向かって広がる契機があつたように思える。そのへんの事実関係を聞かせて頂きたい。

関本 広いイスラーム世界につながるためにはイスラームの知識人が必要だと思う。当初

スリナムにやって来たジャワ人は皆、なんらかの意味でムスリムで、現在20%がキリスト教徒だが、その他の大多数はムスリムである。しかし現在に至るまで、イスラーム世界につながるカルチュラルブローカーがいないので、イスラームによって何かつながるということにはならないと言える。またスリナムのムスリム人口をエスニックに分けると、一番多いのはインド人、次にジャワ人、クレオールである。そして現在に至るまでモスクは全く民

族別で、統一の動きはない。言語が違うから出来ないというのが彼らの理由である。

土屋健治 カルチュラルブローカーということでは、例えばジャワのスリンピなりワヤンなりの文化要素をスリナムに伝える仲立ちとなった人達はどのような人なのか。それに関連して、スリンピでもワヤンでもいいんだが、それは市場性を持っているのか、それとも例えば日本人社会が夏になると日本人学校とかで盆踊りをやるというような、その手の話なのかどうか伺いたい。

関本 文献で見ると限りでは、移民労働者の中のたまたま歌や踊りをたしなんでいる者が始めただけで、専門的芸能者が渡って来たわけ

ではない。一つ重要なのは、インドネシア独立後70年代まで、インドネシア総領事館がジャワ文化純化運動を熱心に行っていた。正しいジャワ語や踊り等を教え、才能のあるものはジャワに留学させる。しかしそこでむしろ細部におけるスリナムとジャワの大きな違いが顕在化し、スリナム・ジャワ人の側はインドネシア人がなんと云おうと、これが自分達の文化であるという意識を発達させていく。むしろネガティブな意味で、インドネシア総領事館の果たした役割があるといえる。次の質問だが、プロの芸人はいない。現在一番人気の高い大衆演劇のルドルック劇団にセミプロがいるくらいである。



固めた生ゴムを荷積みする（スマトラ）